

国際漁業学会（JIFRS）短信

<http://www.jifrs.info/>

事務局 E-mail: jifrs.kaiyodai@gmail.com

郵便振替番号：00100-6-26448 国際漁業学会

振込：ゆうちょ銀行 店番 019 当座 店名〇一九店 口座番号 0026448

2024 年度第 2 号

2025 年 3 月 11 日刊

目次

- | | |
|-------------------------------|-------|
| 1. 理事あいさつ「一筋縄ではいかないからこそ」 | 中原尚知 |
| 2. 2024 年度 JIFRS 大会（横浜大会）参加報告 | 邢璐 |
| 3. IIFET2024 参加報告 | 若松美保子 |
| 4. 2024 年度 研究企画委員会の研究会について | 宮田勉 |
| 5. 2025 年度 JIFRS 大会（東京大会）予告 | 松井隆宏 |
| 6. 事務局便り | 事務局 |

1. 理事あいさつ「一筋縄ではいかないからこそ」

中原尚知（東京海洋大学）

東京海洋大学の中原でございます。国際漁業学会の理事を拝命しております。また、事務局長、編集副委員長等の重責も担わせていただいております。学会の円滑な運営に尽力したいと思いつつも、なかなかそのようにはいかず、です。まったく、一筋縄ではいきませんが、みなさまになるべくご迷惑・ご心配をおかけしないようにしたいと思っていることだけをご理解いただきたく。

さて、改めまして、私と国際漁業学会との出会いを振り返りますと、それは 2000 年代初頭のことであったと思います。鹿児島大学の松田恵明先生が明るい口調で学会活動を盛り上げようと言われていたご様子や、私も大学院生として少しかだけ学会運営の仕事をお手伝いさせていただいたことなどが思い浮かびます。その後、近畿大学で養殖マグロの研究をしている頃は少し不義理をしておりましたが、東京海洋大学への着任を機に、大会への参加や事務局でのお仕事をさせていただくなど、少しずつ関係を深めさせていただきつつ、現在に至ります。

国際漁業学会の特徴としては、多くの方が認識されているとおり、会員の専門分野や研究対象、研究手法の多様さ、そして活性度の高さということが挙げられると思います。専門分野としては誤解を恐れずに申し上げれば、漁業経済学・水産経済学という研究者が多いように見受けられます。ただ、それも経済学の応用分野としてその知見を漁業・水産業に適用するという方もいらっしゃるれば、漁業・水産業あるいは水産学という立場から、経済学を始めとする各種社会科学の理論を駆使しようとする方もいらっしゃると思います。このあたり、現場と理論の間での重心の置き方に異同が見えたりして、私的にはとても興味深いと感じています。そしていずれにせよ、水産業の発展と学問的な発展とが不可分であろうとしているところはみなさんに共通しているように見え、

国際漁業学会の魅力になっていると思います。

また、研究手法としては、近年、様々な学問分野において、データに基づく定量的な実証研究が強く求められています。当学会の報告や論文には非常に高度な手法を駆使したのが見られ、その潮流に対応していると認識しています。また一方で、定性的な研究によって複雑な現象を多面的に理解していくことも、漁業・水産業界を相手にしている我々にとっては重要なことと認識しています。なにせ、みなさんご承知のとおり、漁業・水産業界は一筋縄ではいかないですから。国際漁業学会が、時には相容れないように見える両方のアプローチを懐深く受け入れていることは、極めて有益なことであり、これもまた大きな魅力だと思います。

一筋縄ではいかないからこそ、やり甲斐があったりやって楽しかったりするわけですが、やらないといけないことは多々あり、当学会は優秀な研究者を擁しているものの小規模な組織であり、活性度の高さでカバーしているのが現実だと思います。毎年度のシンポジウムや共同研究の機会はあるものの、より一層の会員間での連携や協働に大きな余地が残されていると思っています。現場と学問、定性と定量、異分野からのアプローチなどなど、様々な可能性があるでしょう。私もとくに若手ではなくなっていますし、微力ながら、学会・水産業界の発展に少しでも寄与する、という方向への注力を高めていきたいと考えている所存です。どこかの機会でみなさまとごっくばらんにお話できればと思います。今後も、現場的にも学問的にも意義がある研究に向け、楽しく邁進しましょう。

2. 2024 年度 JIFRS 大会（横浜大会）参加報告

邢璐（東京海洋大学大学院）

2024 年 8 月 24 日・25 日に渡り、国立研究開発法人水産研究・教育機構横浜庁舎にて国際漁業学会（JIFRS）2024 年度大会が開催されました。私は本学会の大会に今回初めて参加しました。今回のテーマは「漁業・養殖業の成長産業化と経営イノベーション」で、私が興味を持っているフルーツ魚の付加価値と消費者行動に関する研究に非常に役立つと思い、この大会への参加を申し込みました。以下では、シンポジウムと個別報告について述べさせていただきます。

大会 1 日目のシンポジウムでは、解題の後に、研究者 4 名による研究報告が行われました。水産研究・教育機構の宮田先生による解題では、世界的な水産物の需要が増加する中、日本の漁業は物価上昇の影響を受けて利益が低下するという課題と気候変動の影響で漁獲量が変動し、経営体の多角化や協業を進めることの必要性、また経営イノベーションに対する関心が低い現状が指摘され、新たな協業やプロセスイノベーションの重要性が指摘されました。

第 1 報告では、東京海洋大学の婁先生から、北海道猿払漁協の取り組みを事例に、地まき式ホタテガイ漁業における経営イノベーションの意義と課題が報告されました。猿払村は「日本一豊かな村」として知られ、個別漁家が地域経済に寄与している成功事例として紹介されました。成功の要因には、地まき式技術の定着や民主的な協議の他に、「共同企業体」や「共同値決め」の仕組みを通じた経営イノベーションがあり、本報告では後者に焦点を当てた分析がなされました。猿払漁協の取り組みは、個別漁家が集まり協力することで経済的な成果を上げる新たなモデルとして意義深く、漁業の衰退が進む中で、地域の特性を生かした経営イノベーションが示す可能性には大いに期待できると感じました。また、技術革新だけでなく、協働の重要性が強調され

ている点も印象的で、今後、他の地域にもこのようなモデルが広がることで、日本の漁業全体の再生につながるのではないかと思います。

第2報告の東京海洋大学の松井先生は、三重県鳥羽市浦村地区のカキ養殖業者が設立した「株式会社浦村シーファーム」における協業化の効果と課題を報告されました。協業化はコスト削減や収益性向上の手段として注目されており、特に生産段階からの協業化が実現した事例として位置付けられており、浦村地区の事例は、漁業の共同経営が新たな可能性を開くという内容でした。高齢化やコストの問題に直面する中で、協業化がもたらす効率性や持続可能性は、他地域の漁業にも適用できるヒントになり、漁業権の分配や配当のあり方など、長期的な運営において注意すべき点が多いことが理解できました。地域に根ざした柔軟な制度設計が、漁業の未来を支える鍵となることを学ぶことができました。

第3報告の東京海洋大学の中原先生はクロマグロ養殖の現状と事業システム、特に大手水産会社（マルハニチロとニッスイ）の役割について報告されました。大手企業は技術開発や販売ネットワークの強化を通じて市場でのシェアを拡大し、イノベーションを推進していることが分かりました。また、課題としては、クロマグロ養殖は高収益であるものの高コスト・高リスクであり、近年では生産量が増加する一方でコスト上昇や環境リスクが影響を及ぼしていることから、今後は、コスト削減や海外市場の開拓、中小企業との連携が重要になっていることが分かりました。水産業の持続可能性を高めるためのイノベーションの重要性を再認識でき、大手企業の取り組みが今後の市場動向にどう影響するのか、また中小企業との協力がどのように進展するのかに、今後私自身も注目していきたいと思いました。

第4報告は、近畿大学の有路先生による「ブリ類養殖の現状と成長産業化の方策（養殖・加工流通・輸出の現実）」でした。ブリ類養殖は日本の給餌養殖の中心で、年間約14万トンの生産がなされており、水産庁の養殖業成長産業化総合戦略も策定され、海外市場の拡大が必須とされていますが、競争力の弱さ、脆弱な魚病対策、規制の違い、褐変問題、マーケティング不足などが課題とされており、近年ではさらに円安や餌代の高騰、過剰生産、国内需要の減少、高水温による成長不良、労働力不足が新たな課題として浮上しており、多くの課題が山積していることについて、具体例をまじえて分かりやすく紹介いただきました。これらを解決するためには海外輸出が鍵とされており、特に、国内市場の縮小や国際競争が厳しさを増す中で、いかにして海外市場に対応していくかが鍵になっていることが分かりました。なかでも魚病対策や労働力の確保は急務であり、研究者や業界関係者が協力して取り組む必要があると感じました。ブリ養殖の持続可能な成長に向けた取り組みは今後の水産業にとって非常に重要であると考えます。

翌日は、2つの会場に分かれて、計14タイトルの個別報告が行われました。

小松先生の報告は、水産物産地の競争力を高めるための水産クラスターの役割を、気仙沼市の事例を通じて探求しています。水産クラスターは、流通・加工業者を中心に多様な関連事業者が集積し、漁獲物を流通させる重要なシステムです。気仙沼市は生鮮カツオ水揚げで27年連続日本一の実績を持ち、その水揚げは他県籍の船によるものです。本報告では、気仙沼市のフードシステムと漁船サポートシステムを分析し、カツオ船を支える構造と機能を明らかにしました。買受人の価格支えや多様な等級のカツオ受け入れが確認され、問屋を中心に人と船を支える仕組みが形成されています。水産クラスターは、今後の水産物産地の発展に必要な視点を提供するものと位置付けられています。

神山先生の研究内容は食品消費にも関係しているので、私もとても興味があります。この研究

は、日本における水産缶詰の消費実態を把握し、購入金額に影響を与える要因を明らかにすることを目的として、2023年11月に12都道府県の6,826人を対象にウェブアンケートを実施し、消費者の水産缶詰に対する認識や利用方法を調査しました。料理の食材としての利用についても同様の傾向が見られ、調理の有無にかかわらず、おかずとして利用する消費者が重要なマーケットであることが示されました。

最後に、この大会に参加することで、今まで知らなかった専門的な知識をたくさん学ぶことができました。報告者の先生方や事務局をはじめ関係の皆様へ感謝します。誠にありがとうございました。

3. IIFET2024 参加報告

若松美保子（東京海洋大学）

2024年7月15日から19日にかけてマレーシア・ペナン島にてIIFET2024が開催されました。日本では猛暑が続いており、南より北に向かいたかった筆者ですが、日本の酷暑に比べると常夏の地の夏の方が若干過ごしやすいように感じました。クアラルンプールに次ぐ都市圏らしく、高層ビルが立ち並び、舗装された道路にたくさんの車が走っており、交通渋滞が問題と聞くと、東京とあまり変わらない印象を持ちました。ただ、夜になってビルの合間の通りに屋台が並ぶとアジアらしい雰囲気も見られました。

初日は主催者代表とIIFET会長による歓迎の言葉から始まり、すぐに授賞式となりました。授賞式ではIIFET fellows等の発表とともにJIFRS Yamamoto Prizeも発表されました。受賞者のLe Kim Longさんとは授賞式後に雑談をしていて、ベトナムでIIFETが開かれた際にホストしたことや、そこで実際に山本先生にお会いしたことを嬉しそうにお話してくれました。ちなみに今年のJIFRS Yamamoto Prizeには10名の応募があり、Honorable MentionとしてNaila Bhatさんも選ばれました。



(IIFET 会長による開会の様子 (左)。山本賞授与の様子 (右)。)

本大会はIIFET fellowsによる基調講演だけでなく色々な分野の専門家の基調講演が毎日散りばめられていました。学会におけるトレンドは引き続きGenderを押している雰囲気が感じられましたが、新しく栄養学が注目されていました。基調講演でも栄養学を専門とするShakuntala Thilsted氏がトップバッターで講演し、普段とは違った視点の話はとても新鮮でした。途上国におけるタンパク質摂取の手段として水産物が特に重要であることはこれまでも研究等で指摘さ

れてきたことですが、栄養・健康の面における水産物摂取の便益は非常に大きいことが指摘されていきました。こうした視点の研究は、水産物の一大消費地である日本において多くなされていることが予想され、日本人研究者による研究も引用されていました。アメリカ人研究者と雑談した際にも Food system の授業を新しく担当するというような話も聞き、欧米において、供給側における介入に注目する制度論的な研究から消費側により近い研究に関心がシフトしている印象を持ちました。他には、マレーシアにおける漁業セクターの現況やマレーシアの水産政策当事者の講演、マレーシア、東ティモール、ナイジェリア、ケニアにおける南南協力に関するポリシー・ラウンドテーブルが生まれ、盛りだくさんの内容でした。

個別報告では、53セッション、280以上の研究発表がありました。筆者が参加したセッションでは、タスマニア大学の Yamazaki 氏による衛星データを用いた公海における海洋保護区の影響を検証した研究がとて有益でした。高度な計量テクニックを用いて厳密な介入効果の推定を行っており、結果からは海洋保護区の有効性が確認されました。同じセッションで、生物多様性が漁獲量に与える影響を操作変数を用いて検証した研究やアメリカにおける National Flood Insurance Program が鮭の生息地に与える影響を回帰不連続デザイン等を用いて検証した研究があり、漁業の実証研究においても因果推論が当たり前になってきていると感じました。同時に、小規模漁業の環境への取り組みの事例研究をまとめた研究や文化人類学者によるインドネシアの漁村における取り組みを紹介する研究も同じセッション内で発表されており、こうした多様な研究を包括する IIFET の魅力も感じました。

最後に、雑多な感想です。大会の地はペナン島の中心地であるジョージタウンにあるホテルでしたが、このジョージタウンは歴史的な建造物を多く有しており大部分がユネスコの世界文化遺産として登録されています。バンケットはそうした歴史的な建物の1つを貸し切って会場が設けられました。食事もとても美味しく、観光を同時にすることもでき、子連れで参加をしたので大変な事も多かったのですが、楽しい思い出にもなりました。また、1年間の産休・育休を経て久しぶりの学会参加となり、集中力が続かない、高度な研究の話しになると頭の回転が遅くなる自分に気づき、これからリハビリに励まないといけないという現実を思い知りながらの帰路となりました。



(バンケットの様子。生演奏に続き、マレーシアの伝統的な踊りの披露も(右。))

4. 2024年度 研究企画委員会の研究会について

宮田勉研究企画委員長

近年、魚価が高まる一方で、物価高にともなう費用も高まっており、経営分析の必要性が高まっていることから、「漁業における財務・会計」と題して、本学会員が中心となって主催している「漁業経営勉強会」と共催で以下のとおり開催しました。

開催日時：2024年10月10日（木） 10:00-12:00

- (1) 国内外の漁業の財務会計の研究・書籍の状況（水産研究・教育機構 神山龍太郎）
- (2) 漁業・養殖業の経営分析の実際（水産研究・教育機構 宮田勉）
- (3) 農業法人における管理会計（福岡大学 飛田努）

第1報告では経営データ収集の目的として内部目的（自己診断等）、外部目的（資金調達等）、政策的目的（規制の影響評価等）が挙げられた。ただし、実際の漁家経営などに保存される会計記録では、費目に一貫性がないことや、労働や資産のデータが不十分なことも多く、上記の目的を達成することが困難となることも指摘された。

第2報告では、漁業経営の実態調査の豊富な経験に基づくノウハウや注意点が報告された。多様性の高い経営（漁業種類、生産規模、自家加工等）の中で代表的な経営を押さえることの重要性や生じうるバイアス、経営資料・漁協資料・ヒアリングを組合せた調査のアプローチなどが紹介された。

農業における事例を紹介した第3報告では、法人化した経営において管理会計が経営管理の重要なツールとなったことが指摘された。また、事例農業法人において用いられていた「集落還元額」（農業法人の収益のうち集落内に支払われた金額の合計）の考え方は、近年水産分野で注目される海業の取り組みにも有用と考えられた。

5. 2025年度 JIFRS 大会（東京大会）予告

松井隆宏大会運営委員長

2025年度大会は東京海洋大学にて行う予定です。多くの会員、関係者の皆様からのご参加をお待ちしております。

会場：東京海洋大学品川キャンパス（予定）

〒108-8477 東京都港区港南 4-5-7

日時：2025年（令和7年）8月30日（土）～31日（日）

日程：8月30日 午前：各種委員会・理事会

午後：シンポジウム（漁業の経営学的研究と経営支援施策に関するテーマを予定）

夜：懇親会

8月31日 午前：個別報告（申し込み数が多ければ午後も）

午後：総会等

参加費：一般会員 2,000 円

一般非会員 3,000 円

ただし、漁業関係者や学生は無料

6. 事務局便り

1. 2024年度 国際賞、国内賞について

2024年度の国際賞（JIFRS YAMAMOTO AWARD）は、Le Kim Long さんが受賞されました。国内賞は該当がありませんでした。次年度以降も推薦をお寄せくださいますようお願いいたします。

2. 今後の大会シンポジウムテーマ等について

今後の大会シンポジウムテーマや個別報告の特別セッションなどにつきまして、企画提案を募っておりますので、ご提案や企画などがございましたら、事務局までご一報いただけますと幸いです。

3. 会費や大会参加費の納入について

本短信の冒頭に記した情報をご確認のうえ納入をいただきますよう、よろしくお願いいたします。また、国際漁業学会は非営利団体の免税事業者のため、インボイス登録を行っておりません。年会費や大会参加費の消費税については課税対象外（不課税）となります。

4. 短信への寄稿について

今号では、JIFRS 大会の参加報告を邢璐さんに、そして IIFET2024 への参加報告を若松先生にお寄せいただきました。大会の振り返りや研究活動に関する情報共有としてとても意義があると思います。ありがとうございました。

2025年も国際漁業学会における活発な活動をよろしくお願いいたします。